

## 大原孫三郎宛児島虎次郎書簡について-2

On the Letters from Kojima Torajiro to Ohara Magosaburo, Part 2

水島博 (公益財団法人有隣会研究員)

MIZUSHIMA Hiroshi (Researcher, Yurinkai Foundation)

柳沢秀行 (公益財団法人大原芸術財団シニアアドバイザー)

YANAGISAWA Hideyuki (Senior Advisor, Ohara Art Foundation)

### 要旨

本「大原孫三郎宛児島虎次郎書簡について-2」においては、大原孫三郎(1880-1943)が生活の拠点とした倉敷市の大原本邸に残された、大原へと児島虎次郎(1881-1929)が送った書簡のうち、「大原孫三郎宛児島虎次郎書簡について」(「大原芸術研究所紀要第1号」 大原芸術研究所 2025年5月。以後【紀要1号】)で取り上げなかった55通の書簡を紹介する。

書簡の発信時期は、1902(明治35)年10月8日から1906(明治39)年1月19日にわたるもので、【紀要1号】で紹介した1903(明治36)年6月30日より1907(明治40)年11月27日までの40通の書簡と時期的にも重複するものである。

【紀要1号】で紹介した40通は、1907(明治40)年3月より開催された東京府勸業博覧会美術展へ児島虎次郎が出品した《なさけの庭》、《里の水車》の制作過程と、その後、渡欧するまでの児島の動向を把握できる書簡を優先的に選んだ。今回の55通は、【紀要1号】の40通が知らせる動向を補足するとともに、いくつかの新たな事実を伝える。

ひとつは、児島が、須磨の住友家別荘で同家のコレクションを見たことである。逆に言えば、住友友純(春翠)によるクロード・モネ、ジャン＝ポール・ローランス、鹿子木孟郎、浅井忠などのコレクションが、画学生に限定的な形であろうが公開されていたことを示す。

それから、東京府勸業博覧会美術展を境に、児島虎次郎と対照的な人生を歩むことになる青木繁(1882-1911)が、発表当時から高い評価を得た《海の幸》1904(明治37)年制作のために滞在した房総布良海岸の至近の場所に、青木滞在の翌年に児島も訪ねていたことが明らかとなった。児島が、青木の存在をどのように意識していたのかを考える一つのきっかけとはなろう。

---

Of the letters Kojima Torajiro (1881-1929) sent to Ohara Magosaburo (1880-1943) and which were kept at the Ohara's principal residence in Kurashiki-shi, Okayama, where Magosaburo was based, the fifty-five letters which were not included in "On the Letters from Kojima Torajiro to Ohara Magosaburo" in *Bulletin of Ohara Art Institute 1* (Ohara Art Institute, May 2025, referred to hereafter as *Bulletin 1*) are introduced.

These letters were sent between October 8, 1902 (Meiji 35) and January 19, 1906 (Meiji 39). Date-wise, they overlap with the forty letters from June 30, 1903 (Meiji 36) to November 27, 1907 (Meiji 40) introduced in *Bulletin 1*.

In *Bulletin 1*, priority was given to forty letters describing the process through which Kojima produced *Garden of Sympathy* and *Watermill in the Village*, two paintings he submitted to the Tokyo Industrial Exposition in March 1907 (Meiji 40), and Kojima's activities before leaving for Europe. The fifty-five letters introduced here supplement the content of Kojima's activities introduced in the forty letters presented in *Bulletin 1* and also convey some new evidence.

One newly confirmed point is that Kojima saw the Sumitomos' collection at the Sumitomo family's villa in Suma, Hyogo. This conversely indicates that the art collection including works by Claude Monet, Jean-Paul Laurens, Kanokogi Takeshiro, and Asai Chu assembled by Sumitomo Tomoito (Shunsui) was shown, though probably in restricted form, to art students.

Secondly, we found out that Kojima visited Mera, Chiba the year after Aoki Shigeru (1882-1911) stayed there. Following the outcome of the Tokyo Industrial Exposition, Aoki was to lead a life in stark contrast to that led by Kojima. In order to produce *A Gift of the Sea*, 1904 (Meiji 37), Aoki stayed in a location close to Mera Beach on the Boso Peninsula. The fact that Kojima visited Mera the following year prompts us to give thought to Kojima's awareness of Aoki's existence.

「大原孫三郎宛児島虎次郎書簡について」(「大原芸術研究所紀要第1号」大原芸術研究所 2025年5月。以下【紀要1】)において、大原孫三郎(1880~1943)が暮らした岡山県倉敷市の本邸に残された児島虎次郎(1881~1929)からの書簡のうち、特に児島の学業と画業に注目して1903(明治36)年6月30日より、1907(明治40)年11月27日まで40通の書簡を紹介した。

引き続き、この「大原孫三郎宛児島虎次郎書簡について」2において、前回取り上げなかった1902(明治35)年10月8日から1906(明治39)年1月19日までの55通の書簡を紹介する。

前号と同じく、大原孫三郎宛児島虎次郎書簡の翻刻は、水島博が行った。水島による【凡例】も参照のこと。

柳沢秀行は、すでに前号で紹介済の書簡と時期的に重複するため、書簡の日付の前後関係にも注意しながら、※以下に字体を変えて、内容と注意点を示した。

#### 【凡例】

- 一、史料の体裁はできるだけ原本に従ったが、改行はいちいち指摘していない。
- 一、異体字・俗字などについては、一部を除き、常用漢字・正字へ改めた。
- 一、繰り返し記号は、「々」(漢字)・「々」(ひらがな)・「ヽ」(カタカナ)で表記し、二文字以上の繰り返しは、「く」で示した。
- 一、史料の判読を考慮し、適宜、「」(読み点)・「・」(並列点)を挿入した。
- 一、誤字や脱字・衍字については、該当箇所「」カ「」カ「」脱カ「」(「衍カ」と記した。また、意味不明な箇所には「(ママ)」を付けた。但し、助詞や濁音などの軽微な誤りや多数の誤記が連続するなど、煩瑣に過ぎると判断した場合は、訂正を省略した場合がある。
- 一、本文の訂正抹消は、二重取り消し線で示し、訂正文字を右行間に記した。抹消などで文字が判読できない場合は、■で示した。また、行間等に挿入されている文字は可能な限り行間に記し、必要に応じて「」で括り右肩に(朱印)・(朱書)・(異筆)などと示した。
- 一、判読に疑念の残る文字については、右行間に(カ)と記した。
- 一、封筒の表・裏書については、改行を「」で示した。
- 一、書簡の年月日については、本文・封筒裏書・消印等から特定を行っているが、疑問の残る年月日は、( )で示している。
- 一、記載を配慮すべきと判断した人名は□□<sup>(人全)</sup>、などと記した。
- 一、今回記している「F」と「別」で始まる史料番号は、飽く迄も仮番号であり、今後大原家文書整理が進んだ場合、番号が変更されるものである。

以上

(1) 大原家文書 F・193 明治三五年一〇月八日

〔封筒上書〕  
〔備中国倉敷町／大原孫三郎様〕

〔封筒裏上書〕  
〔東京下谷区谷中上三崎／南町四拾四番地 雲衣象潭方／九月八日 児島虎次郎〕

次郎

拝啓、

御高堂益々御壮栄の段奉賀候、陳バ本日為替券在中の御書簡正に拝受仕候、就而ハ領収証差送り候間、御落手被下度候、先ハ当用迄、不具

九月八日

児島虎次郎

大原様 侍史

---

※この年9月、児島虎次郎は東京美術学校西洋画科選科に入学する。また夏に倉敷の大原家を訪ねて、大原家による奨学金の支給を受けることとなる。

---

(2) 大原家文書 F・194 明治三五年一月一〇日

〔封筒上書〕  
〔備中国倉敷町／大原孫三郎様〕

〔封筒裏上書〕  
〔東京下谷区谷中上三崎／南町四四、雲衣象潭方／十一月十日 児島虎次郎〕

拝呈、

御高堂愈々御清栄の段奉賀候、本日御送付被下候本月分学資正に落手仕候、別紙領収証へ記名調印封入致置候間、御改手被下度、此段御通知申上候、敬具

十一月十日

児島虎次郎

大原孫三郎様

---

※前月の書簡とあわせ、大原家による奨学金は月毎の支給で、都度、受給者は領収書を送ったことがわかる。

---

(3) 大原家文書 F・195 明治三六年五月二日

〔封筒上書〕  
〔備中国倉敷町／大原孫三郎様〕

〔封筒裏上書〕  
〔東京下谷区谷中上三崎／南町四四、雲衣象潭方／五月二日 児島虎次郎〕

拝啓、

御高堂愈々御壮栄之段奉大賀候、四月分学資、  君共拾四円正に落手仕候間、此段報知仕候、領収証小生の分丈封入致置候、  君ハ同氏より送付有之べく候、

次に甚た申兼候へ共、本月九日より九月十日迄夏期休暇に付、本月より九月

迄の学資ハ備中成羽町新町児島虎次郎宛にて御發送被下度御依頼申上候、何れ休暇中にハ御伺申べく候、

岡山孤児院へ御寄附に相成油絵、大抵本月中に差送られ可申候、藤島先生方話され候由、一寸御報知申上置候、同図案（下画）ハ揮毫され次第差送り可申候、

先ハ当用迄如斯に御座候、草々

五月二日

児島虎次郎

大原孫三郎殿

※東京美術学校の夏季休暇は5月9日より9月10日まで4ヶ月にも及び、その間、児島は故郷の現在は高梁市成羽町に帰省したことがうかがえる。

「岡山孤児院へ御寄附」「藤島先生」と記された作品は、藤島武二作《獅子の子落とし》（1903年 社会福祉法人 石井記念友愛社蔵）で、この年の8月2日に大原孫三郎より岡山孤児院へ寄贈されている。同孤児院を創設運営した石井十次に強い感化を受けた大原孫三郎だが、同年3月17日より同孤児院の評議員となつたばかりであった。そうした時点で、児島を通じて藤島へと依頼制作を行い、孤児たちを鼓舞するような画題の作品を岡山孤児院へ贈つたわけである。児島は、岡山孤児院で制作した《なさけの庭》（1907年 皇居三の丸尚蔵館蔵）により、1907年の東京府勸業博覧会の美術展で一等賞となり、さらに大原の支援による5年間の滞欧後には石井十次の娘である友と1913（大正2）年に結婚する。

（4）大原家文書F・196 明治三六年五月一六日

〔封筒上書〕  
倉敷町／大原孫三郎様／親展〕

〔封筒裏上書〕  
成羽町新町／五月十六日 児島虎次郎〕

拝啓、昨日ハ罷出失敬仕候、昨五時無事帰郷仕候間、然様御承知被下度候、本日領収証差送り申候間、御落手被下度候、何れ近日中、日を定め御訪問可仕、此段御通知申上候、頓首

五月十六日

児島虎次郎

大原孫三郎様 侍史

（5）大原家文書F・197 明治三六年六月一三日

〔封筒上書〕  
都窪郡倉敷町／大原孫三郎様／侍史〕

〔封筒裏上書〕  
川上郡成羽町／六月十三日 児島虎次郎〕

拝啓、先日中ハ罷出で種々御配意に預り、尚帰省の際には一方ならざる御心配被下候段、厚く奉謝候、昨日四時無事帰宅仕候、末筆ながら御高堂皆々様へ深く御礼申伝へ被下度、先は御礼申述べ度如斯に

御座候、頓首

六月十三日

大原先生 机下

児島虎次郎

別に学資受領証封入致置候間、御落手被下度候、

(6) 大原家文書 F-198 明治三六年六月一五日

(封筒上書)

〔都窪郡倉敷町／大原孫三郎様／侍史〕

(封筒裏上書)  
〔川上郡／成羽町新町／六月十五日 児島虎次郎〕

拝呈、

本日、藤島先生より別紙到着仕候間、手紙之趣御承知被下度候、

尚、荷物の送先は御手元より都合宜敷方、先方へ御一報被下度願上候、

次に、恐れ入り候へ共、報酬其他の費御送金願上度、同氏に代て御依頼申上候間、悪からず御承引被下度候、

先ハ当用迄如斯に御座候、敬具

六月十五日

児島虎次郎

大原先生 貴下

(別紙藤島書簡)

拝啓、

愈々御雄健奉慶賀候、 扱予而貴君の御紹介ニ依而大原氏方御依囑ニ相成居候油絵ハ、今兩三日中ニ可完成致候処、右ハ大原氏御住宅宛ニ而可送出哉、

又岡山孤児院の方へ直ニ御送り可申上哉、其辺の便宜、貴君方御問合せ被下間哉、<sup>(敷脱之)</sup>尚、<sup>(共カ)</sup>別紙額縁代並ニ運賃等の見積書送呈仕候間、甚だ恐縮之至ニ奉

存候得処、油絵報酬の残額と共ニ御送与被下候様、先方へ御申入被下度奉願候、現品ハ右到着次第、直ニ可送出申候、

右要事のみ、勿々敬具

六月十三日

児島虎次郎君

藤島武二

追伸、油絵額縁外圍の寸法左の通り、

一、 縦六尺一寸三分

一、 横三尺八寸二分

尚、運賃ハ大概の見積ニ付、多少の増減あるはものと■御含み置可被下候、

※書簡(3)で触れた、藤島武二作《獅子の子落とし》が完成し、作品を額装し、岡山孤児院へと送付する次第がうかがえる。

(7) 大原家文書 F-200 明治三六年七月一日

(封筒上書)

〔都窪郡倉敷町／大原孫三郎様／侍史〕

〔封筒裏上書〕  
〔成羽町新町／七月一日 児島虎次郎〕

拝呈、

御華邸愈々御清福之段奉賀候、

陳バ先日御依頼申上置候件、本日又藤島先生より何卒都合有之候故、至急依頼する様申越有之候に付、甚だ恐入り候へ共、至急御運び被下度、此段御願申上候、額面の儀ハ、何時なりとも發送可致旨通知有之候、先ハ当用迄如斯御座候、敬白

七月一日

児島虎次郎

大原先生 閣下

〔8〕大原家文書F・201 明治三六年七月七日

〔封筒上書〕  
〔都窪郡倉敷町／大原孫三郎様／親展〕

〔封筒裏上書〕  
〔川上郡成羽町／七月七日 児島虎次郎〕

拝復、

御芳墨拝誦仕候、御封入之為替証式枚合計額九拾円参拾銭記入、正に落手仕候、只今早速藤島先生宛にて發送仕候間、然様御承了被下成度候、

本月下旬御旅行之由、大低差支無之事と存じ居り候間、御一報被下候へバ、

罷出可申候、

先ハ御返事迄如斯に御座候、頓首

七月七日

虎次郎

大原先生 閣下

〔9〕大原家文書F・202 明治三六年七月一三日

〔封筒上書〕  
〔都窪郡倉敷町／大原孫三郎様／侍史〕

〔封筒裏上書〕  
〔川上郡成羽町／七月十三日 児島虎次郎〕

拝啓、

愈々御多祥之段奉慶賀候、

昨日、藤島先生方報酬金額正に拝受致され候旨通知有之候間、然様御承引被下度候、就而ハ外函荷造り等額椽屋へ依頼致され候処、同店目下歌舞妓座にて活人画行業準備の爲め、此十五日迄ハ非常之繁忙にて、其方濟次第、直に着手荷物發送すべき様都合にて、少日遅延致候処、不悪御承知可下御依頼有之候間、御聞濟被下度願上候、

今回御依頼之絵は、閣下の御芳志に感じ、万事殊に注意致置候様、先生方特に通知有之候、

先ハ不取敢御報知旁御断申上候、敬白

七月十三日

児島虎次郎

大原先生 閣下

岡山にて 児島虎次郎

(10) 大原家文書 F-203 明治三六年七月一九日

(12) 大原家文書 F-205 明治三六年八月二六日

(封筒上書)  
〔都窪郡倉敷町／大原孫三郎様／親展〕

(封筒上書)  
〔都窪郡倉敷町／大原孫三郎様／直披〕

(封筒裏上書)  
〔川上郡成羽町／七月十九日 児島虎次郎〕

(封筒裏上書)  
〔川上郡成羽町／八月廿六日 児島虎次郎〕

拝啓、

拝啓、

御芳簡拝誦仕候、就而は其趣家人に相計り申候処、度々罷出るは因て閣下へ迷惑を相掛けるべき事故、此度見合せ遠慮可致様申勧め候に付、家人の言に従ひ、昨日取急ぎ発電致置候、何卒不悪御海容被下成度、此段御断り旁々御返信申上候、頓首

七月十九日

児島虎次郎

大原先生 閣下

(11) 大原家文書 F-204 明治三六年八月二四日

(表面)  
〔都窪郡倉敷／大原孫三郎様〕

(裏面) (美力)  
〔拝啓、沙見の吉田方小生の古靴送り来る筈に付き、到着仕候へバ、甚だ失敬

の至りに候へ共、■湛井の河田運送店迄御送り被下度御願申上候、

大原大兄 閣下

八月廿六日

児島虎次郎

閣下の御揮毫になれる土瓶の絵、小生の手元へ持帰り失敬仕居候間、出京の節持参致べく候間、然様御承引被下度候、  
何れ出京の節罷出で御礼申述べ、先は当用迄如斯に御座候、敬具

一昨日帰途、岡山孤児院を拝観仕候、ライオン額中々傑作と存じ候、  
二宮尊徳翁の油絵も面目なる傑作<sup>真</sup>と覚江申候、

座候、此旅行は余生涯の最も楽しき旅行の一つと終生忘れまじき事に候、  
(人名)  
□□君の受領証、小生のと共に封入致置候間、御落手被下度候、

※児島が岡山孤児院を訪ね、藤島武二作《獅子の子落とし》を見たこと

を伝える。「二宮尊徳翁の油絵」は不明。

(13) 大原家文書 F・206 明治三六年九月二二日

〔封筒上書〕  
〔備中国倉敷町／大原孫三郎様／直披〕

〔封筒裏上書〕  
〔東京下谷区谷中／上三崎南町四四雲衣方／九月十二日 児島虎次郎／〔扇〕〕

拝啓、

朝夕次第に凌ぎよく相成り候処、御高堂愈々御清栄之段奉賀候、小生一昨日午後九時過、無事着京仕候間、乍憚御放神被下度候、先日御依頼有之候書籍、慥に人生の快樂と承り候が、右書は何所の書店にても皆品切之由に候、若し小生の聞誤りにて、高橋五郎氏之著、人生観にてハ候ハざりしや、若し人生観に候へバ、御一報被下候へバ、至急御送り可申候、先ハ御返事被下度待入候、頓首

九月十二日

児島虎次郎

大原先生 台下

※児島が東京へ戻ったことと、大原の希望する書籍の購入にもあたっていたことを伝える。

(14) 大原家文書 F・207 明治三六年九月二八日

〔封筒上書〕  
〔備中国／都窪郡倉敷町／大原孫三郎様〕

〔封筒裏上書〕  
〔東京下谷区谷中／上三崎南町四四雲衣方／九月廿八日 児島虎次郎〕

謹啓、本日林氏の広告図案三枚郵送仕候間、御落掌被下度候、図案に就ての参考、一寸相述へ可申候、

甲は薬種染料医用器械なる文字を蜘蛛の網に擬したるものに候、若し読み苦しく候へバ、全体の網を去て、右文字を階書(楷カ)か行書かに改むる方宜敷かるべく存候、

乙の文字は只其位置の配合のみ示し置候、丙も同様なる事に御座候、以上、福田君と共に考案致候へ共、未だ浅学の事に候へバ、御氣に適ひ不申候共、不悪御承了之上、充分なる御意見にて訂正之処御示し被下度御依頼申上候、三枚の内にて、使用する分のみ一枚御送り被下度願上候、  
外に薬瓶形の図案は少々御猶予被下度願上候、  
先ハ当用のみ如斯に御座候、頓首

九月廿八日

児島虎次郎

大原先生 閣下

※児島が、大原が関係する広告図案も手掛けていたことを伝える。「林氏」は、大原家近くで薬問屋を営み、大原や石井十次とも密接な交友をもった11代林源十郎と想定される。

福田君については、GACMA東京美術学校在籍者一覧(明治22年〜昭和9年入学者)」(<https://gacma.geidai.ac.jp/archives/GACMA-enrollment-list03.pdf>)に1902(明治35)年入学者として岡山出身の「福田淡」の記載があり、その可能性が高い。

(15) 大原家文書 F-209 明治三六年一〇月九日

(封筒上書)  
「備中国都窪郡／倉敷町」(朱印)／大原孫三郎様

(封筒裏上書)(朱書)  
「下谷局濟書ニテ通知ノ」／東京府南葛飾郡／隅田村字三在百拾壹番地／

長尾奈太郎方／十月九日 児島虎次郎

謹啓、

御高堂益々御清適之段奉大賀候、

陳バ本日小包にて油絵習作三枚差送り申候間、御落掌被下度候、甚た延引致し候段、不悪御海容被下度候、次に先日差送り候林氏の広告凶案御落手被下候哉、就而は如何致すべきや、失敬ながら御一報を煩し度願上候、

小生儀数日前表記の所へ転居仕候間、然様御承引被下度候、当地は鐘ヶ淵の傍綾瀬と申処に御座候、東京上野へは殆んど二里近くも有之候、極田舎にて景色之宜敷事は東京の名所の一つと数へらえ候、隅田川も恰度側に流れ居り候、小生は通学往復三時間の徒歩を厭ず、塵煙深き都を去りて、清けく浄なる此田舎の空気の内自然のに景色を友として、汲々勉強致すべく企て候、

三時間の徒歩は健脚を鍛へるに足るべく、周囲の景色は我頭を満し、己が腕を養ふに足るべき事に御座候、

小生の今度転居致候宅は、同じ故郷より出でられし先輩の画家の住家に御座候、

是れより愈々聖書を以て無二の友と致すべく候、

甚だ役立たざる事なと書加へ候段御断り申上候、頓首

十月九日

大原先生 台下

児島虎次郎

追啓、為替取次局は(下谷郵便局)に願上候、

※児島が、同じ成羽出身の先輩画家長尾奈太郎の家へ転居したことを伝える。上野まで2里あり、往復徒歩3時間という距離だが、周囲の環境を気にいつてのものか。

注目すべきは「聖書を以て無二の友と致すべく」の記述である。石井十次は熱心なキリスト教信徒であり、その宗教心ゆえに岡山孤児院の運営に尽力し、大原孫三郎もその感化もあり一時期聖書を熟読した時期もあった。ただ児島虎次郎はその近くにありながら、キリスト教とは距離を置いていたと考えていたが、一時的にでもあれ、児島が聖書読解に取り組んだことは今後のさらなる考察の対象となるであろう。

(16) 大原家文書 F・210 明治三六年一〇月九日

〔封筒上書〕  
〔備中国〕都窪郡倉敷町／大原孫三郎様

〔封筒裏上書〕  
〔東京府南葛飾郡〕隅田村字三在百十一番地／長尾奎太郎方／十月九日 児島虎次郎

拝呈、

本月分学資、本日正に拝受仕候、領収証封入致候間、御落手被下度、此段御通知旁々奉鳴謝候、敬白

十月九日

児島虎次郎

大原先生 台下

(17) 大原家文書 F・212 明治三六年一二月一三日

〔封筒上書〕  
〔備中国〕都窪郡倉敷町／大原孫三郎様／侍史

〔封筒裏上書〕  
〔東京府南葛飾郡〕隅田村字三在百十一番地／長尾奎太郎方 児島虎次郎  
十一月十三日

拝啓、本月分之学資金八円也、昨日為替にて拝受仕候に付、別紙領収証へ記名調印致置候間、御改め被下度候、

外に壱円絵はがき代御送付に相成、正に落手仕候、本日買求め郵送仕候間、

御落掌被下度候、方々相尋ね申候へ共、是れ位之物より上等之品無之候に付、然様不悪御承引被下度候、此犬之種類も三軒にて漸く買纏申候、内には高価之品も混じ居候間、御覧被下度候、

十一月十三日

児島虎次郎

大原先生 足下

【別紙1】

記

一、金三拾六銭 はかき 拾弍枚

右請候也、

十一月十三日

山城屋 (印)

上

【別紙2】

記

金弍拾七銭 絵はかき 八枚

〆

右正ニ請取申候也、

十一月十三日

海雲堂 (印)

上

【別紙3】

記

金卅六錢也 絵はがき 四枚

ノ

右正ニ受取候也、

明治卅六年

十一月十三日

〔東京市神田区表神保町二番地  
(印)〕

文房堂池田治郎吉(印)

上様

(18) 大原家文書 F-214 明治三六年二月二七日

〔封筒上書〕  
〔備中国倉敷町／大原孫三郎様／親展〕

〔封筒裏上書〕  
〔東京府南葛飾郡／隅田村百十一番地長尾方／十二月廿七日 児島虎次郎〕

拝啓、

寒さ厳しく相成候処、御高堂愈々御清適之段奉大賀候、小生儀無事健全にて  
勤学致居り候間、然様御承引被下度候、

本年も僅か数日を余すのみと相成候、学校は去る十九日より冬期休業と相成  
候、日々郊外写生やら遠足などして新なる年を相待ち居り候、当地は隅田の  
川風烈しく、寒気は東京之比に無之候へ共、霜之朝、冬枯の月夜など景色の

美しさわ中々話しに相成り不申候、まして此上にも雪降初めなば、嘸かし好  
景は層一層之美を増さんものと相待居り候へバ、寒さも川風も意とする程に  
は御座なく候、此の寒さ加り此の風起ればこそ、此の美しき景色に<sup>を眺める事を得、此景</sup>励され筆とる  
勇気を呼起し得る事を考へ申候へバ、実に自然と神とに感謝する之外御座な  
く候、

次に本月分学資正に拝受仕候、別紙受領証差送り申候間、御落手被下度候、  
末筆ながら御自愛專一に御高堂之万福を奉祈候、頓首

十二月廿七日

児島虎次郎

大原先生 台下

(19) 大原家文書 F-215 明治三七年一月九日

〔封筒上書〕  
〔備中国倉敷町／大原孫三郎様／侍史〕

〔封筒裏上書〕  
〔東京府南葛飾郡隅田村／百十一番地長尾方／一月九日 児島虎次郎〕

拝啓、

本月分之学資正に拝受仕候、就ハ領収証差送り申候間、御改め被下度、右御  
報知申上候、

先日、上野美術協会のセントルイ博覧会出品美術品陳列を參觀仕候、  
全体を通して見るべきもの無之、寂寞之方に御座候、西洋画の出品は大低諸  
氏<sup>(抵カ)</sup>の旧作のみにて、僅か新に博覧会出品として描きたるもの有之候、日本画・

彫刻などには、目に留るもの殆ど無之候、陶磁器にては、稍傑作を見受申候、然し大坂の博覧会に比すれば、粗製品少なく、傑作多き方に御座候、此頃は上野公園も物淋しく、展覧会も今は皆無に御座候、雪消へ桜色つく頃、此公園も人を以て満さるゝ、近き間に御座候、草々

一月九日

児島虎次郎

大原先生 閣下

※「上野美術協会のセントルイ博覧会出品美術品陳列」とは、1904（明治37）年4月からアメリカのセントルイスで開催された万国博覧会に向け、その美術部門への出品作を、上野公園内にあった日本美術協会展品館で1903（明治36）年12月26日、27日に展覧したもの。準備期間が短かったため、児島も記すように、内国勧業博覧会出品作からの選択であった。

(20) 大原家文書 F・216 明治三十七年二月一三日

〔封筒上書〕  
「備中国倉敷町／大原孫三郎様／執事」

〔封筒裏上書〕  
「東京府南葛飾郡／隅田村百十一番地長尾内／二月十三日 児島虎次郎」

拝啓、承り候へば、此程より御病氣之由、御容体如何に御座候哉、奉案候、早速御伺申上べく之処、誠に御無沙汰仕り申訳無之候、時下寒氣強烈之候、

折角御養生專一に奉祈候、

先ハ御病氣御見舞申述度如斯に御座候、敬具

二月十三日

児島虎次郎

大原先生 台下

(21) 大原家文書 F・217 明治三十七年二月二五日

〔封筒上書〕  
「岡山市／岡山県病院内／大原孫三郎様／親展」

〔封筒裏上書〕  
「東京府南葛飾郡／百十一番地長尾方／二月廿五日 児島虎次郎」

拝啓、御病氣追々御快方の由承り安心仕候、御入院などの事とは存申ず失敬仕候、嗚々御淋しき事と奉察候、尚御養療專一に御全快の期をのみ待入候、次に本月分の学資金八円也正に拝受仕候間、取領証差送り申候に付、御改被下度御報知申上候、

梅一輪一輪づゝの暖さとは相成申候、当地之梅も赤く白く香ばしく成初申候、墨堤の春も近づき申候、本冬は例年に無き寒さの強き事に候へ共、降雪は一程度有之候のみにて写生之為めには残念の事にて候へ共、人々の多くは悦び居り候、

戦争話も一時は非常なりしも、此頃は余程冷却したる様に見受られ候、小生は幸に戦争熱に浮されず専心勉強致居り候間、然様御承引被下度候、不一

二月廿五日

児島虎次郎

大原先生 台下

※日露戦争勃発直後の児島の心情が記される。

(22) 大原家文書 F-310 明治(三七)年三月一四日

(封筒裏書)  
「備前岡山市／岡山県病院にて／大原孫三郎様／侍史」

(封筒裏書)  
「東京府南葛飾郡隅田村／百十一番地長尾方／三月十四日 児島虎次郎」

拝復、

其後御病氣次第に御快方之由承り、誠に不及ながら心嬉しき事に御座候、最早御全快の期も程近き事と奉察候、

次に昨日三月分之学資正に拝受致候間、受領証差送り申候に付、御落掌被成下度候、

昨朝来より之吹雪、夜に入て烈しく、今朝戸を開けバあわれ此世も一夜の中にたくみの女神の御手により、美しき浄き銀の天の国土と化し去りぬ、春之雪筆とるひまもあらむこそ、午過ぎ宅に帰る時には空しく消へて影もなし、雪も去り梅の見頃も何時の間にか過ぎ申候、此次き桜之花も近づき申候、其れにつれ思出され候ハ、去年の夏に候、如何に楽しき夏なりしか、富海之浄き浜辺、宮島の鏡之如き月之夕、月之夜五日市山上之物語、櫓音揃へて旅路急だ波の上、名も仙酔の島遊び、清き沙見之浜辺の日の出夕陽、皆一つとし

て吾記憶を去るものは御座なく候、

次の週間より試験始まり可申、此週は臨時休暇と相成り候、されと次の週迄に成績として差出すべき裸体画壹枚描き置くべき事に御座候、裸体画は各々自宅にて製作すべき事と相成り候に付、一昨日より友人なる田端にある画室を借り、モデルを雇描き始め申候、

先般来より御病床のつれづれを慰め候はん為め、何か拙作御目に懸け度考へ候へ共、別に見るべきもの出来不申差控へ居り候処、御教訓に従ひ、よし其画は見るかげもなき拙き筆には候へ共、小生が御病床を飾り御慰め候ハんと本意のまゝ、失敬ながら本日小包にて最近の習作画式枚差送り申候間、御笑覧被下度願上候、此頃小生は

「活きる為めに描かず、描く為めに活きよ」

「己のあるを知て己を忘れよ」

と云ふ事を我理想として自然に接し居り候、是は全く神の黙示に寄て、我心の底へ伝へられ候事と存居り候、

四五月頃御上京之噂承り楽み待居り候、其節は親しく平素之御無沙汰謝し可申候、頓首

三月十四日

虎次郎

大原先生 台下

※大原孫三郎が長期にわたり体調を崩していることがうかがえる。

児島の学業に関しては、裸体画が課題として出されながら、学生が自宅にて制作のうえ提出を求められていることが注目される。田端の画室を借り、モデルを雇って制作を進める記述があるだけに、職業モデルを、

— 学生が独自に雇える時期となったことがわかる。 —

(23) 大原家文書 F・189 明治三十七年八月二〇日

(封筒上書)

「播州明石相生町／中崎交中館／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏上書)

「備中国成羽町／八月廿日 児島虎次郎」

御芳墨拝誦仕候、

時ハ何時の間にか消へ行き候、甚た御無沙汰致し申訳も無之候、酷暑之候にもかゝらず、御健全にて候哉伺上候、

生儀変りもなく消光致居候、思ひ望む程の勉強出来不申閉口致候、

御教示被下候「新しき夫婦」とも云ふべき画題に付き深く考へ候に、未だかゝる大なる思想を世人に語るべき余に技の熟せざるを思ひ起し候、余ハ後日、此の画題の下に研究を積み、忠実なる製作を成さん事を決し候、今より展覽

会などに人に観せんなどの企ハ余り大胆に、又余り不責任なる仕事と感じ候まゝ、余ハ此の休暇を以てモデルの研究をなさばやと、余が<sup>友</sup>の諾するまゝ、

或ハ隣家の小女などを乞ふて只無意味なる写生を始め居り候、かゝる研究の致方は、余の本意とする所に候、然し充分の勉強出来ざるハ愚の至りに候、

帰郷してより毎日、友など、此地の小学校に午後打寄りて、テニスの仕合を致居り候、技術の上達は致さゝるも、心身の壮快を覚江候、

去る十四日の頃より、我祖母の大患に<sup>(か脱カ)</sup>かり<sup>(カ)</sup>医士の診断にて局部肺炎と語り候、

年老ひたる身の其苦しみ思やらるゝまゝ、病床を去るに忍びず、絵筆捨て傍に看護する事茲に六昼夜に候、一日たり共余か天職を怠るは余の意ならず候へ共、出て、家のあらざる身の此期を幸に出来る丈けの看病致さんものと存居候、此間か余の職を怠るは大に天に謝する所に候、

生の上京は<sup>多分</sup>当地九月上旬出発可致考へ居り候、

八月分学資拝受仕候に付、受領証差送り候、

先ハ当用迄に候、末筆ながら諸君へ宜敷御伝へ被下度、幸に先生御保養專一奉祈候、頓首

八月廿日

大原先生 台下

虎次郎

※大原孫三郎が、「新しき夫婦とも云ふべき画題」を児島に示したことを伝える。この時、すでに大原は妻帯しているが、画学生である児島に何を求めたのか興味深い。郷里成羽に帰省中の様子を伝えつつ、児島が巧みにその課題を受け流していると読めるだろうか。

(24) 大原家文書 F・219 明治三十七年一〇月一日

(封筒上書)

「播州明石相生町／交中館／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏上書)

「東京府南葛飾隅田村百十一長尾方／十月一日 児島虎次郎拜」

秋冷相催し候折から御変り無之愈々御壮栄之段奉大賀候、

御送りに相成候写真一葉落手仕候、早速描始め可申候、

先日御依頼申上候処、早々御返信被下奉謝候、

先般小生上京之際御話し被下候通り相成り候へバ、小生にとりてハ此上なき

好都合之事に御座候、

今凡そ一ヶ月の学資として申述べ候、

絵具代として普通に勉強して凡そ五円位費し可申、尚勉強次第により以上を

要する事に御座候、<sup>掛用品</sup>食料雜費拾円と見積り候へバよからん、是の他に余の望

む所はモデル費に御座候、余は<sup>今後</sup>絵画の組立に付研究すべき必要を認め申候、

毎日の午後を是の研究に費し度希望致居り候、モデル費は一ヶ月の内二十日

間、半日雇ふ事として、三四円位あればよからんかと存し候、

此の他参考書と要する場合有之候へ共、皆価高き品に候へバ、当分見合る事

と致すべく候、

御存しの通り、かゝる道は勉強すればする程、費用の嵩む事に御座候、

かゝる次第に御座候へバ、何卒宜敷御計り被下度、小生が運ハ只足下の御手

まかせ置べく候、余は足下が多なる御好意は、余が天職の上に忠実に務む

る事に於て決して無視せざらん事を契申上候、

右余が心のまゝを以て懇願仕り候間、宜敷御聞取り被下度、伏して御返信之

程待入候、

前途尚深遠されど余は慥に一つの光明を此間に見とめ申候、此の輝きに照ら

されて余が本分を全くし得られん事、心の中嬉しく望み居り候、

末筆ながら御令室様・古藤君へ宜敷御伝へ被下度願上候、

先ハ当用迄如斯に御座候、不具

追啓、

白馬会十一月十三日迄開會に付、閉會次第、油絵御送り可申候、他にも一式

枚有之候間、共に御送り申べく候、

十月一日

大原先生 台下

虎次郎

※児島が、経費を細かく知らせながら、「かゝる道は勉強すればする程、費用の嵩む事に御座候」として支援額の増加を願ひ出ている。第9回となる白馬会展へは《習作—少女》、《風景》を出品したことが知られるが、その他の作品とあわせて大原へと送る旨が記される。

(25) 大原家文書 F・218 明治三七年一〇月二八日

(封筒上書) 播州明石相生町／中崎交中館／大原孫三郎様／親展

(封筒裏上書) 東京府南葛飾郡隅田村／字三在百十一長尾方／十月廿八日 児島虎次郎

拝啓、

其後も御変り無之愈々御清適之事と奉大賀候、

生儀無事勉学致居り候間、然様御承引被下度候、

陳バ先日御願申上候件、如何なる御都合に御座候哉、御返事無之に付き待案

じ居り候、

甚た勝手ケ間敷次第に候へ共、我希望のために小生は是非共御許可被下様何  
処迄も嘆願して止まざる儀に御座候、

御多忙中と察し候へ共、相成るべくは早速何とか御一報被下度御願申上候、  
(か脱カ) かる事ハ足下か御感情に障る様の事ハなきかと恐れ入り候、不敬の罪謹で謝  
し可申候間、何卒不悪御承了之程願上候、敬白

十月廿八日

虎次郎

大原先生 台下

追啓、甚た恐れ入りたる次第に候へ共、小生等の如き当地にあまり知己なき  
ものは、学資の後れた時ハ勉強上(ら脱カ) 一方なさる困難にかゝり申べく候間、御手  
元の都合の出来る過り勉強上の御便利御与へ被下度、謹で御願申上候、以上、

※支援額の増額願ひへの返信がないことを尋ねているのだが、追伸  
部分で、「学資の後れた時ハ勉強上一方なさる困難にかゝり」と所信を伝  
えている。

(26) 大原家文書 F-220 明治三七年一月七日

(封筒上書)  
「播州明石町相生／中崎交中館／大原孫三郎様／侍史」

(封筒裏上書)  
「東京府南葛飾郡／隅田村百十一番地長尾方／十一月七日 児島虎次郎」

玉章拝読仕候、貸資増額御許可被下候段、誠に感謝之至りに不堪候、

本月分と昨月分との学資為替にて正に拝受仕候に付、受領証差送り申上候、  
御申越被下被下候通り、一ヶ月廿四位あれば、小生の志す道に向て研究出来

る可き事と考へ居り候、精しき事ハ知れ不申候へ共、多分出来る事と存じ候、

兎に角実行致さハ大低之事も知れ可申候と存候、閣下高き御恵之程、終始念  
頭を去るなく、充分勉励可致候、

肖像の額様、(縁カ) 明日額椽屋へ問合に参上可致候、恰度符合の形有之候へバ幸に  
候へ共、若し品切にて調製するに余り時日を要する様に候へバ、肖像丈後れ

さる様差送る考へに御座候、大分持合せ居る事と察居り候、

白馬会の模様、一寸申上候、大概ハ当地の新聞紙などにて御承知之事と奉察  
居り候、

本年の会にハ余り目立つ程の傑作ハ殆んど見受け不申候、昨年迄ハ小生ハ白  
馬会場へハ開会幾度入場して彼所此所之絵画の前にイみ、又隅みからすみ迄  
往候、かゝる身なりしに、本年余か帰郷の節又上京の際、須磨の住友の別荘  
に立寄り、今度などの 歐洲大家の作品を参観したる目にハ、白馬会場へ幾度も足を運ぶ

の勇なく候、只々余か頭中のに何となく我芸術界の現状に就而、或る大なるも  
のに恥する様な感堪へさる次第に御座候、少し生意氣過さるかも知れませぬ  
が、一笑被下度候、別紙古びたる目録御一覽被下度候、現時大家と称へる、

黒田・和田・岡田・藤島諸先生の内にて、和田氏の八百屋御七と、吉三、を  
描たるものは、製作前よりの呼物なりしも、余りの出来にハ無之、小生の目  
にハ岡田先生の冬の図一寸宜敷候、藤島先生ハ特意の図案的のもの数枚を出  
品され候、変て居て面白く候、他に目に付くものも御座なく候、会ハ本月十  
三日迄に御座候、何れ其中に御様子申上べく候、

本日ハ当用迄に申述置き候、寒氣追々加り候折柄、御養身専一奉祈候、不具  
十一月七日  
虎次郎拝

大原先生 台下

※支援額の増額がかなう。

注目すべきは、白馬会の作品に言及しつつ「本年余か帰郷の節又上京の際、須磨の住友の別荘に立寄り、歐洲大家の作品を參觀したる目にハ」と伝える点である。「住友春翠―美の夢は終わらない」図録（公益財団法人泉屋博古館 2016年2月）が紹介するように、住友家15代当主である友純（春翠）が集めたクロード・モネ、ジャン＝ポール・ローランスなどの西洋絵画と、鹿子木孟郎、浅井忠など日本人による洋画が住友家須磨別邸にて縁故者などには公開されていたが、児島がそこを訪ねたことがわかる。文面の書きぶりや、大原と住友のこの時点での距離感からして、紹介者は、黒田清輝か藤島武二と推測される。

(27) 大原家文書別2152 明治三十七年一月一三日 【図1】

(表面朱書)

「播州明石町／相生中崎交中館／大原孫三郎様」

(裏面朱書)

「御手紙拝読、高き御言葉に恐縮仕候、十三日 虎次郎／五尺に七尺位の大／吉二と御七」

(28) 大原家文書F1221 明治三十七年一月二三日

(封筒上書)

「播磨国明石町／相生町中崎／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏上書)

「東京府南葛飾郡／隅田村字三在百十一七長尾方／十一月廿三日 児島虎次郎」

小春の日和打過き心地よろしき候に御座候、嘸明石の浜辺あたりながめ美しき事と奉察候、

白馬会へ出品中なりし少女の顔の絵、本日小包にて御送り申上候、

(緑カ) 額椽も差送り候間、先日肖像へ御嵌有之度候、

此の

外に一枚静物画差送り申上候、此の絵ハ小生の今秋上京したる時、余が庭の草花美しく咲盛りたる何となく余の心を起さしめ候、折から友の房州より土産にとて、綾なす貝の色々を贈りければ、幸直に写生致し候、貝を見てハ昨夏の旅行思出され、花をながめてハ行先しのぼる、秋の様を思ひわづらはれ候、此絵ハ余が目ハ一寸趣味ある事に候、

肖像も此絵もあまりうまくも無之候へ共、余が心にハ當時に相応して真面目に描たる積りに御座候間、幸に御一覽の上、批評給り度、余か望む所に御座候、御遠慮なく充分に願上候、余が技の発達を計り給はゞ、此外描たるもの

近々

少く有之候へ共、第二次恤兵展覧会あるやの尊有之候に付、其節充分奮て出品仕り会の趣旨を全致度、其為め準備として止置可申候間、然様御承知被下度願上候、

此頃ハ何となく張合よく勉強致居り候、卒業製作なる自画像殆んど一ヶ月振

にて此頃出来上り候、花凋み葉散りつる此頃、郊外の写生最早や望み無之候、是れより室の内にてモデル写生の候と相成り候、其れに付て甚だ申兼候へ共、来月分の学資相成るべく候へバ、来月早々御送り被下度、勉強上の勝手を計り無遠慮に御依頼申上候、額椽の代価式円取替置候、右不悪御聞取被下度候、次に本日差送り候小さき絵方の適當の額椽錦地にて御調製有之度望み居り候、後々同様の大きさのもの差送り可申候間、其度に額椽に入れ御覽被下度候、額椽ハ如何なるものにも宜敷候、錦地に鏡の商店有之候へバ、其所へ其注文あらバ出来る事と存候、若し無之候へバ、大工に造らしむるも宜敷事に候、椽の形ハ御好にまかせ置候が、通当ハ金地か木地かの式種に候、毎度我侘なる事のみ申上甚た恐縮の至に不堪候、

十一月廿三日

虎次郎

大原先生 台下

追啓、

来月よりモデルを雇ひ充分勉強致度望み居り候、

※白馬会出品作を含め、大原へと送った自作についての記載。現存作品で同定できるものは見いだせず。またモデルを雇うため送金を早めにと請いつつの追伸の記載が児島らしい。

(29) 大原家文書別 2-54 明治三十七年一月二十九日 【図2】

(表面)  
「播磨国／明石相生町／大原孫三郎様」

(裏面)  
「先日送出し候小包御落手被下候哉、伺上候、銀杏の黄な葉も楓の紅の葉早やいつの間にか散はて候、野辺ハ淋しき冬枯と相成り候、十一月廿九日 虎次郎拜／此絵二尺一尺五寸位」

※ここまで書簡の送り先が、明石相生町となっているが、これは大原孫三郎が体調がすぐれず療養のため長期間、明石に滞在したため。ただその間、家督相続の話が進み、この書簡が送られて間もなく一切の事務手続きが終わり、孫三郎は大原家当主となる。

(30) 大原家文書 F-222 明治三十八年一月一七日

(封筒上書)  
「備中国倉敷町／大原孫三郎様／煩親展」

(封筒裏上書)  
「東京市本郷千駄木林町／二二四 中川方／一月十七日 虎次郎拜」

寒さ追々加り候へ共、早梅の花のちらほらと咲初め候に何となふ心楽しく相成り候、

御華邸御揃愈々御清栄之事と奉賀候、

生儀無事勉強怠りなく候、本月分の学資拝受仕候間、受領証差送り候、就而ハ何となく云にくき次第に候へ共、少々御願申上候間、不悪御聞取被下度候、御約束申置候通り、本月習作絵差送るべき筈の所、展覧会之挙行あるやに承り延引之儀願上候所、約束の違反より学資に不足を生じ、折角やり初めたる勉強研究もこゝに一時中止せざるべからざる事と相成候事、実に残念至極に御座候も全く不肖の罪に候、

しかしかゝる場合、歩を止むる事ハ甚た馬鹿ばかりき事に候へバ、御約束の通り習作画近日之中何るべく早速発送可致候間、前月の通り余分之学資御貸与被下度間敷候哉、毎度我ま、勝手なる事のみかさねく御願申上候、然し生ハ拙きものゝみ差送り候事、甚だ御気の毒千万なる事と恐入候へ共、何卒御機嫌悪しく思召さず、尚此上も御同情を煩し度、こゝに嘆願申上候、

前申上候通り、小生ハ前月の通りの学資額をあてにして研究おはじめ居り候に付、其だけの額は如何にしても得ねバ、今の所研究中止の不幸に帰るべく候間、何卒其辺御高察之程願上候、其だ御手数ながら小生より習作画発送するも苦しからず候哉如何、御伺申上候間、右御承諾可否と共に御一報の勞を煩し度く、右御願申上候、

目下、研究科の競技中、少々多忙之様子乱筆にてあらくかき奉り候間、御推読之程願上候、草々

正月十七日

虎次郎

大原先生 台下

※長尾奎太郎宅から、東京美術学校へも近い千駄木へ転居している。

書簡の内容から、児島は研究報告的に絵画を大原へと送っており、そ

れが展覧会などの事情で送れなかったことから、送金が減額された様子  
がうかがえる。かなり厳密な相互のやり取りによって支援が行われたこ  
とがわかる。

(31) 大原家文書 F1235 明治三八年二月三日

(封筒裏上書)  
「備中国ノ都窪郡倉敷町ノ大原孫三郎様」

(封筒裏上書)  
「東京本郷千駄木林町ノ二二四 中川方ノ二月三日 児島虎次郎」

拝復、

早速御貸与被下候学資、昨日正に拝受候、

一昨夜来の降雪、見事に積み飾り候、昨朝写生を校内之林之間に相はじめ候  
処、稍より落ち来る雪之塊は、頭の上やら調色板、画布や絵具箱の内やら、  
処きらわず非常の困難と烈しる寒さと戦た揚句、やつと一枚の写生は出来致  
し候へ共、絵具箱をかたづけかゝる頃よりぼつ／＼頭か痛み出し、未だ今日  
当りも痛去ず、全く風引の災難を給り候事に御座候、

先日のお雪にも出懸て写生も得せず、風を頂戴して帰り候、中々油断之ならぬ  
時節に御座候、

此頃少々用事差かゝり居り候に付、此位にて失敬仕るべく、何れ後便にて御  
報導致度存居り候、

御正月之元日は明日だそうで、嘸御宅は御賑な事と奉察候、

末筆ながら御令室様へ宜敷御伝へ被下度、御自愛專一に奉祈候、敬白

二月三日

虎次郎

大原先生 台下

※【紀要1】掲載「(3)大原家文書F1223 明治三八年一月二六日」、

「(4)大原家文書F1311 明治(三八)年一月二八日」で、東京美術学校での様子を詳細に伝えているが、荒天での制作(支援対象)の大変さを伝える本書簡の内容からは、継続的な支援への切実な要請の気持ちが感じ取れる。

(32)大原家文書F1224 明治三八年二月二一日

(封筒上書)

「備中国／都窪郡倉敷町／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏上書)

「東京市本郷区駒込／千駄木林町二二四／中川方／二月廿一日 児島虎次郎」

久しく御無沙汰仕候、時候も大分春めき候処、御高堂皆々様御変せもなく御

壮栄之事、謹而慶賀奉り候、

生儀、幸に勉強怠りなく候間、御放神被下度候、

先月、競技試験が済み候まゝ、やれ〜と思ふ矢先、またぞうらう研究科の

競技(試験に同じ)は相始められ候、

今度のハ少々大役にて、甲は静物之写生、乙は八犬伝を題として図を構製す

る事に候、

静物之分はかなり大なる画布に候、乙之方ハ只下絵に候、(静物とハ活きざる総て之物を云ふ言葉に候、即ち器具・野菜・草花之類・魚類も此の内に含み居り候、生なき鳥獸も加へられ候、先般御送り置候貝殻など描た小さきものハ絵は静物画と云ふべきものに候、)以上は共に自宅製作と云ふ有様に候故、余等素寒貧之連中はほと〜困り居り候、道具類や美しき布など面白く候へ共、中々集める事出来不申、花と云ふて未た色美しきものも少なく、果物に於てもおなじき事に候、

然し何か描かねばならぬ事に候故、考へ暮し居り候、期限は三月の中旬頃に候、一つ骨折りにやる考へに候、面白る美しきものは費用を要する事、此辺ちと苦しき事に候、

かゝる都合に御座候へバ、毎度には候へ共、本月分之学資、何卒御手数なからせる〜早く御送り被下度、礼を忘れ勝手のみ申上、恐れ入り候へ共、不肖をして真面目なる日科に就くの幸を与へられむ事を切に御願申上候、右不悪御聞取被下度候、本日小包郵便にて風景画式枚御送り申上候間、御落手被下度候、一つは先日申上置候雪の景色、小生之寒氣と戦るまけて風引きたる時の製作に候、

一つは旧寓綾瀬の辺に候、夕日は早や空に見江ずなりぬ、薄紫之富士の高き峯は、かなたの薄雲の間に現れたり、風なきて無心の白帆はうす墨と色かへてかなたの岸辺の森近く見られたり、墨田の水は流止めて恋しき友なる夕顔を待つと見江たり、

御高覧の上御一評被下度待入り候、

二月廿一日

虎次郎

大原先生 台下

※研究科の課題に取り組む様子を伝えるが、いわゆる構想画として「八犬伝」に取り組むとしているのが興味深い。想定される作品は確認されていない。

後半は大原へと送った2点について伝えるが、そのうち「旧寓綾瀬の辺に候、夕日は早や空に見江ずなりぬ、薄紫之富士の高き峯は、かなたの薄雲の間に現れたり、風なきて無心の白帆はうす墨と色かへてかなたの岸辺の森近く見られたり、墨田の水は流止めて恋しき友なる夕瀬を待つと見江たり」と記述されているのは、「児島虎次郎油彩画総目録（WEB版）」（以後、【総目録】（[https://www.ohara.or.jp/collection/kojima\\_reisone/](https://www.ohara.or.jp/collection/kojima_reisone/)）にNo.12として掲載した作品とすべき可能性が高い。それゆえ同作品は、児島が長尾李太郎宅に住んだ1903（明治36）年10月から翌年12月頃までの間の制作と想定される。

〔33〕大原家文書 F・225 明治三十八年三月六日

〔封筒上書〕  
備中国／倉敷町／大原孫三郎様／親展

〔封筒裏上書〕  
「東京市本郷区千駄木／林町二二四 中川方／三月六日 児島虎次郎」

花之節句はすぎ去り候へ共、まだ春之味とてハつき不申候折から、閣下御変

せもなく御清福之段奉謹賀候、

本日、別紙受領証の通り、学資金拝受仕候、今度は少々例より多額に候が、如何なる御考へに御座候哉、伺上候、

絵はかき代拾円としては驚き入り候が

閣下が深き同情を以て不肖が研究に一層之御尽力を給り候にや、とんと了解致され不申候、

若し愚考之如くに候へバ、余ハかくまで閣下之誠なる情を寄せらるゝ事を以て、身にあまる光栄と奉存候、余ハ己が研究せんとする上にかゝる血ある資を得たるの幸福なる事を真に奉感謝候、

今夕方御絵葉書着、御高説とくと拝承仕候、

余は正しき永久不変之強き意志を以て此の無限の務めを真面目なる研究を以て実行可致誓置き候、

次に御申越之小供の絵はがきは如何様なる品に候哉、日本製と外国輸入のもの

（抵力）

のと有之候、大低写真版之事と察し置き候、数は如何程に候哉伺上候、御はがきに「一〇」と有之候ハ金高なるにや、又拾枚に候哉、判じ難く候まゝ、

兎に角拾枚程早速御送り可致候、

競技の静物画は、野菜、果物、瓶など取集め写生中に御座候、

八犬伝は伏姫富山の洞にて神童と語る所を構図可致考へに候、此の所之訕は、伏姫が実に烈婦たる高き心操を現したる所にて、宗教の味と詩の美とを充分含み居る様考へ居り候、

小石川植物園温室内の写生、今般許可され候へ共、例の競技中にて暇無之候ま、相延す事と致候、然し其頃には早や菜種の花も野に見ゆる頃と相成り候はんか、

末筆ながら謹而御高堂の愈々御壮栄ならむを奉折候、頓首

三月六日夜

虎次郎

大原先生 台下

※研究科の課題に取り組む詳細を伝える。静物画も現存確認できない図様である。

(34) 大原家文書別 2156 明治三八年四月四日 【図3】

(表面)  
「備中国／倉敷町／大原孫三郎様」

(裏面)  
「先日は御鄭重なる御手紙を賜難有拝謝奉り候、

一昨日東京出発、当沼津へ滞在致居り候、毎日之降雨にて閉口致居り候、早く材良を採訪せねば心配でなりません、期限が短かくなりますので、何れゆる／＼御音信致すべき考へに御座候、

四月四日

東海道沼津港橋東際

大橋屋旅館にて

虎次郎拝

大原先生 台下

(35) 大原家文書 F1226 明治三八年五月四日

(封筒上書)  
「備中国倉敷町／大原孫三郎様／煩親展」

(封筒裏上書)  
「東京本郷区千駄木林町／二二四中川方／五月四日 児島虎次郎」

花之曇りも晴れすぎて、若葉之露たなひき候折から御許にハ御変せもなく御清福之事と喜び居り候、

ゐつも／＼も疎遠かちにて申訳無之事に候、手紙かく位の暇なきにあらざるに、思ふ事のみ重なり行きて、筆とる事之後れ勝なる誠に自分之不規律さを何時も手紙認め候節ハ思ひ出で候、沼津滞在中にもろ／＼之御音信不仕、帰宅後引続き少々用事にかゝり居候、

旅行は誠に心地よきものに候、其うちにも春之旅ほどよろしきものはあるまじく候、山間に生育たる私共は、海辺に日を送り候へば、全く地極(獄カ)の人が極楽へ行きたる様の思ひ浮び候、

朝之海・夕之海実(威カ)に罪なく美しく覚江候、我入道之浜は極平和な静けき所に候、

若芽もへ出たる浜一面老松之影朝日受けたる伊豆之山々、薄赤く気持よく前に蟠れり海水は、染料にもならむと思はるゝ程青く候、薄色の品之よる空に入残た月がぼんやりと軽く浮び居候、沖には白帆之あちこちに輝き、一夜を海之上にて働き明し、労れながらも意勢よく帰る舟、ゑもの望みて漕き行く舟之等しく金色なしてゆき来ふこそ嬉しく候、

あちらこちらより寄りつどふ老婦小女之手にさる桶などさけて沖なかめつ、

歸る舟まちて打かたれり、  
噫人誰虚榮を望む、世の汚れたる人に見せ度きハ、漁父が平和なる此の生活なれ、

静けきこの浜に住む事一ヶ月、稍その平和之味覚江られ候、私の今度之製作も此の味を世の人に分たんと骨折り候、

されど不幸なる事にや、一ヶ月の間晴天わづか五六日、其内嵐二日を差引き候へバ、三四日位の事、頭に止まり候感しも少なく、写生も出来不申、残念の外無之事に候、

今度描き候図は、画面之大サは先般送り置き候秋草之庭を描き候絵の倍位に候、

老たる漁父一人、手拭かぶりて浜辺に干したる網之手入致居る処に候、浜にハ暖かく日当れり、空はや、曇り気味にて、静かなる海のかなたに田子の浦、遠く富士の裾引連なれり、網すく漁父の只一心に働く傍に、極無邪気なる幼き子の食物を口にしあるあり、浜に寄せたる漁舟一二艘あ外、別にかき現したるものなく候、平凡と云へバ誠に平凡なる図に候、私は平凡なる頭を以て、平凡なる図を作りたる事に候、意味に於て平凡なる丈け正直と平和を現したる積りに候、何分描く日少なく、期日せまり来り候ま、致方なく帰京仕り候、此のま、学校に差出す事ハ如何にも私の忍びさる所に候ま、昨日黒田先生之語らるゝにまかせ、先生の宅へ持行き批評を乞ひ、其上にて修製する事に致候、

全体の構図はよろしく、漁夫の穏なる生活の様現れ居れる様申され候、今少しと云ふ写生の不足なる所に候由承り、もとより写生は思ふ半分も出来居らず候事に候ハ、構図（組立）之悪しくなきと云ふに、余程自分なから力つき

勇み候、されバ私も思ひたけ之製作を終へて学校に差し出す（き脱力）様願候処、心よく来月の中旬迄にて宜敷故骨折てやつて見るがよゐ、力之つくは斯様なる場合にあるから、充分やるならバ君の為めになるのだからと申され候、私も今一ヶ月半も時日のある事に候へバ、別に描きかへる考を述へ候処、同じ描き更へるなら、此の図の倍位な大きな物に改めた方よからん、骨折も加るから費用など考へずに無中でやつて見るべき様、ゐと親切に教示被下候、斯くの如く何となく大なる力ら我身に加りたる様思れ、強き意志と深き感情を以て此の製作にかゝらむとする所に候、如何にしても私ハ今度之責任を充分尽し終る決心に候へバ、何卒其辺御心安く思召し被下度候、深々思ひ厚く考へ候へバ、最早や筆とる力も無之候、色々之感し心頭に満来り候、あ、我ハ斯くして恵み高き閣下の愛に謝する事の出来き得へきし期あらむかを、不幸なる力なき我を斯く迄救る、誠ある閣下に、我ハ常に煩しを加へつゝ、あるにハあらざるにや、

閣下に安き心与ふるハさても何時の事ならむ哉、我ハ閣下の厚き情に向ふて涙なかつ事之禁せざるに候、我ハ救れつゝ、ある此の高き恩と愛とに対して、よく感謝之意を表しつゝ、あるか、

よし其心ありせばとて、よく閣下の恵みに謝するの力あるか、思へバ思ひ来る程罪ある我のかなしきをうらみ居り候、

幸に不肖をして立たしめ給へ、我をして愛の子たるを得せしめ給へ、噫此の上の言葉は出で不申候、謹而一言致すべく候、

閣下の暖かき情に反し、私の感謝之情に於て冷かなる事を自覚致し居り候、かき続くる事も打堪へ候、

御約足致置き候静物之絵、学校より今少し返し来らず候故、受取次第早速御さ

送り可申候間、然様不悪御待ち被下度願上候、今度之漁夫の絵も一枚は学校に、一枚は御許へ差送る考へに御座候、都合により又旅行致かく知れ不申候、右製作の爲めに候、

前途を思へば程々の希望満ちくして思苦しく候、此の夏休暇にハ、親しく拝顔之上申語らんと待ち望み居り候事も少なからず候、

留学、あゝ羨しき事に候、我友は去月仏国留学の途に就き候、見送りたる我と進んで学ばんとする彼とを比せば、心中共に思ひやられ候はずや、されど我も刻一刻に於、勇気の加り進んで前に来る所を得んとしつゝ、あり、志强されハ何の得難き物のあり候ハん、奮起發展我理想に候、

昨日しほく降りたる雨は、実に数万之血ながしたる同胞弔ふ涙なるにや、昨日より神の列に入りし勇士を祭る九段上之招魂社、今日は霽れて日暖かに候、私も同胞之恨みある靈に心ある感謝を捧げんと致す処に候、あゝ天にさまよへる数万之靈よ、兄等何を思ひつゝ、あるか、親ニ別れ、妻を置き愛子に離れて、心なき戦場に出で、罪もなき同胞に剣向け弾丸交へつゝ、遂に勇しの姿を此の世の外に置きぬ、

噫さても不幸なる世の様や、平和々々我ハ聖なる神之命を受けて実に平和之使徒たらむ、誠に戦ほと馬鹿くしきものもある間敷候、

戦わされバ平和続かずとハ、さても愚かなる人の集りたる世の中二候、役にも立たぬ事申述べ失礼致し候、  
まだかく事共山々有之候るしに、頭つまりてとんと何事も思出されず候ま、筆止め可申候、

末筆ながら謹而閣下の健全を祈り居り候、  
陛下の賢き御恵に接したる岡山孤児院之光栄と院長石井氏之名誉を称揚致居候、

五月四日  
大原先生 台下  
虎次郎

※1ヶ月におよんだ沼津滞在を回顧。制作中の「老たる漁父一人、手拭かぶりて浜辺に干したる網之手入致居る処」と記す作品は、【総目録】No. 50、No. 51であり、黒田の助言を入れたことや、今後の所蔵についてもふれているが、現在の所蔵者も児島の記述に齟齬のないものとなっている。また留学に関しては、【紀要1】掲載「(5) 大原家文書F1230 明治三八年七月十四日」の露払いの友人の留学について触れ、自らの思いを伝えている点が注目される。

(36) 大原家文書別1125 明治三八年五月六日 【図4】

(表面)  
「備中国／倉敷町／大原孫三郎様」

(裏面)  
「絵はがき九枚、本日郵送致候間御落手被下度候、  
和製にては六品之絵ハカキ最も高尚にして真面目なるものに候、他の三枚ハ舶来品に候、  
和製にてハイカラ的の極軽薄なるもの沢山有之候へ共、見るに堪へぬ品多く

候、御氣に召か否かと案じ候へ共、私の氣に向た品少々送り置候、各学年の試験始まり候故、研究科は休暇の有様に候、

御全家へ宜敷御伝へ被下度候、謹で高堂の万福祈居候、

五月六日朝

東京にて 虎次郎

大原先生 足下」

(37) 大原家文書 F・190 明治三八年六月一日

(封筒上書)

「備中国倉敷町／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏上書)

「安房国那古町赤井の下／田村虎吉方 児島虎次郎／六月一日」

拝呈、

暑追々相加り候処、御華邸愈々御清栄之段奉大賀候、

其後ハ御無沙汰仕り申訳無之事に御座候、小生儀一昨々日東京出発、房州に

向て乗船仕り候処、風波烈しき為め、浦賀へ寄港、一泊致居候、此日九里浜

の米提督ペルリ上陸地を訪れ候、

翌日、無事当地へ着仕り滞在致居り候、

此日も随分の波風にて、少し閉口致候、

着房以来、日々好天気にて、何より幸福の事に御座候、<sup>真</sup>面目に製作に従事致

居り候間、御安神被下度候、

当地滞在ハ今度ハなかからざる考へに候へ共、製作の都合によりて未定に御

座候、然し製作の提出期日も定まり居り候事とて、一方ならざる心配と骨折ニ御座候、

毎度勝手間敷存じ候へ共、学資を当地の方へ向け御送付被下度き様御願申上

候、当地にハ那古郵便局有之候、

今度の製作にハ誠に閉口致居り候、然し何ても勇氣を以て責任を全ふ可致お

誓申置べく候、私費のかゝる事に就而も一方ならず苦しみ居り候、

先日より天気よき為め大分忙き方<sup>にて</sup>延引致居り候段、不悪御海容被下度、

先ハ御報知旁々御願申上候、

六月一日夜

虎次郎

大原先生 梧右

※1904 (明治37)年に青木繁が、坂本繁二郎、森田恒友、そして恋人の福田たねと共に滞在し、《海の幸》(アーティゾン美術館蔵 重要文化財)を描くこととなった千葉県館山市を、児島もまたその翌年に訪ねていたことを知らせる重要な書簡。滞在地の那古は、青木たちが逗留した布良にも近く、児島もまた同様の海岸風景を目にしたであろう。

(38) 大原家文書 F・227 明治三八年六月八日

(封筒上書)

「岡山県倉敷町／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏上書)

「安房国那古町赤井の下／田村虎吉方 児島虎次郎」

謹啓、

御高堂愈々御清適之段奉大賀候、小生儀無異勉勵致居り候間、乍憚御放神被下度候、

本日、為替にて五月・六月分之学資正に拝受仕候、別紙受領証の通に御座候、

次に、御申越相成候御尊嚴之御肖像之儀、拜承仕り候へ共、とても不肖の如き初学之ものにて御尊嚴が人格など描き出さん事不可能之事と存じ居り候なる事に候へバ、今少し研究之後、製作致度事に御座候、

然し万事御承知之上之事に候へバ、不及ながら製作可仕候間、然様御承引被下度候、然し閣下の御満足に相成る様之事ハ無論出来不申候へバ、前以て御断り申上置き候、

学校之休暇も近づき候間、休暇と相成り候て帰国參堂可仕候、

画面の大きハ、先日御送付致候静物絵より少し大き位のものに可致、(の脱カ)其積りに

て準備可致候、

最も御望みも候へハ、東京之宿所宛にて御報を煩し度願上候、

本年ハ国元の老たる親父母の是非帰省する様、切に申越居り候間、帰郷致す

考へに御座候、何分共に高齢之事に候故、何となく慕しく思ひやられ候、

九州福岡にも伯母と従兄と本年転居致居り候に就き、写生旁々旅行致す考へに御座候、

当地滞在早くも二週日を経過致候、製作も大分捗り候故、近き頃帰京可仕心得居り候、

今度の旅行は幸に好天気引続き、誠に都合よき事と感謝致居候、此の神の意ある所に報るんため、心清く誠の心を以て製作に従事致居り候、

野のあちら、田のこちらと蛍飛びはじめ候、蛍光る頃、蚊の唸る声烈しく相

成候、

末筆ながら閣下の御幸福を謹而奉祈候、

六月八日之夜

大原先生 梧右

虎次郎

※房総での滞在制作を伝えるが、具体的な作品内容が記されていないのが残念なところ。ただ書簡冒頭に、大原孫三郎の肖像制作の依頼があり、帰省時に制作に取り組む用意のあることを伝えている点は注目される。大原孫三郎をパステルで描いた作品が現存するが〔総目録〕No.55)、それを取材時の習作とした油彩画が完成したのだろうか。

(39) 大原家文書 F1228 明治三八年六月二八日

(封筒上書)

「撰津国馬町／兵衛旅館にて／大原孫三郎様」

(封筒裏上書)

「東京本郷区千駄木林町／二二四中川方 児島虎次郎拜／六月廿八日」

芳墨拝誦仕候、

御肖像之大きハ御申越に従ひ準備致すべく候、

御尋ね被下候帰省の日ハ未定に候、なるべく早く帰郷參堂可仕考へ居り候、旅行中製作の絵、未成に付、此頃毎日修作致居り候に付、何れ近日製作品を学校へ提出致し候上、帰国致すべく候へバ、何れ来月早々とも相成るかも知

れ不申、なるべくなれば、御滞在中に有馬へ御訪れたき望みに御座候、同郷の知友、上京中の処、先般中より脚気病にて、今度帰国する様医師の勧めにまかせ候由に就き、保証人より呉々小生に同行を望まれ候ま、同車致すべき事に致居、就而ハ病人の都合にて、二三日位延引するかも不知候へ共、何卒其辺不悪御承引被下度御断り申上候、有馬へ御滞在は何日頃迄に候哉、伺上候、

帰省之節御尋ね可申候へ共、御出立後にてハ駄目なる事に候へバ、一寸御一報を煩し度願上候、先ハ不敢取御返事迄申上度候、

梅雨の候毎日面白くもなき天気続きにて、誠に閉口致居り候、時節柄御自愛専一之程奉祈候、

六月廿八日

虎次郎拝

大原先生 台下

---

※大原から、肖像画のサイズ指定もあったことが分かる。大原はしばらく有馬に滞在し、同地での面会と取材制作を児島が想定しているが、病気の友人への同伴が必要なことを伝えている。

---

(40) 大原家文書 F・229 明治三八年七月五日

(封筒上書)  
「備中国倉敷町／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏上書)  
「東京本郷区千駄木林町／二三四中川方 児島虎次郎／七月五日」

拝復、

本日正午後当地出発可仕候、病人同道に候故、成羽迄直行可致、帰郷早々参堂可仕候に付、何卒不悪御承引被下度、右御報知申上置候、草々

七月五日

虎次郎拝

大原先生 台下

※病気の友人への同伴を理由に、大原と会えなかったことを伝える。

(41) 大原家文書 F・231 明治三八年七月二五日

(封筒上書)  
「都窪郡倉敷／大原孫三郎様／侍史」

(封筒裏上書)  
「川上郡成羽町／七月廿五日 児島虎次郎」

御深情なる御芳志拝承仕り感涙の至に不堪候、何事も閣下の高き理想に相まかし可申候、

来るべき望みある年を頼しみに充分なる準備的研究を可致候、小生ハ何所までも我天職の爲め、献身的戦闘をなさんとするものに御座候、我ハ人にして世の人たらず、霊界の一粒たらんと欲するものに御座候、先日之凶案今一応考案仕るべく候、

絵ハかき二三枚描き候へ共、かきなれさる爲めか、思ふもの出来候はず、今

少し御待ち被下度候、

製作ハ怠りなく務め居り候間、然様御承引被下度候、

末筆ながら御病勢ハ其後如何に御座候哉、御伺申上候、家内一同よりも安否之程案じ居り候、暑氣愈々酷しく相成居り候候、折角之御養生專一に奉折候、頓首

七月廿五日

虎次郎

大原先生 謹呈

---

※【紀要1】掲載「(5)大原家文書F1230 明治三八年七月十四日」  
で、滞欧希望を伝えているが、それに対する大原からの返信は、児島にとっても望むべき内容であったことが察せられる。

---

(42) 大原家文書F1232 明治(三八)年八月二日

(封筒裏上書)

「都窪郡倉敷／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏上書)  
「川上郡成羽町／八月二日 児島虎次郎」

謹啓、

御母堂様の御容体如何に御座候哉伺上候、

暑さ烈しき頃、嘸御心配之事と奉察候、小生儀先日中より齒痛にて閉口致居り候、就而ハ御依頼相成候もの延引仕り、誠に申訳無之事に御座候、甚た勝

手ヶ間敷候へ共、今少し御待のへ被下度、気分も快よく相成候ハ、早速御送り申上べく、呉々も御願申上候、

今更申上へき程の事にてハ御座なく候へ共、人の身の上に病ほとかなしきものハ無之かと覚へられ候、少しの病にても自分の思ひ通り身自の体を自由に使ふ事の出来さる此頃、誠に残念の至りに不堪候、

此身先苦しみて大に世の病める人々の上に心よりの同情を表したる次第に御座候、

面白くもなき事申のべ恐入候、

右不悪御承引被下度願上候、不備

八月二日

虎次郎

大原先生 梧右

---

※児島からは、孫三郎の母恵以の体調への気遣いや、自身の齒痛などが伝えられている。ちょうどこの時期に、大原孫三郎は石井十次など周囲のキリスト教プロテスタント関係者の勧めもあり、洗礼を受けているが、このことを児島は知らなかったのであろう文面となっている。

---

(43) 大原家文書F1233 明治三八年一〇月二日

(封筒裏上書)

「備中国倉敷町／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏上書)  
「東京本郷千駄木林町／二三四中川方／十月二日 児島虎次郎」

時下寒気覚そめ候処、高堂愈々御清適之段奉大賀候、先日中ハながく御厄介に相成り、一方ならざる御厚情に預り候段、謹而深謝奉候、

着京後無事勉強致居り候間、然様御承引被下度候、耳病も追々快方にて、最早医師にかゝる程の事も無之相覚へ居り候、

受領証三ヶ月分差送り置候間、御引合被下度候、慥此丈なりし事と考へ居り候間、一応御檢べ被下度願上候、今日、(人名3)君より来る六日金曜日に茶話会開催の旨申来られ候、当番ハ小生と(人名2)君に御座候、会費ハ(人名3)君の説に拾八名に候へバ、十五円申送る様云加られ候間、其御考へにて御見計ひ御送金の程願上候、

白馬会開會中、本年八十周年とかにて、黒田・久米・和田・岡田・藤島諸氏の旧作品など陳列有之、中々面白く感し候、一寸一通り見物致候のみ、悉しき様子申上かたく、何れ其内模様申上べく候、

末筆ながら向寒の折から御養生專一に奉祈候、御内皆々様へ宜敷御伝言願上候、

先ハ当用のみ申述置候、草々

十月二日

虎次郎

大原先生 台下

追啓、今度の茶話会会費の内、八円ハ(人名1)君の処に預り居る様子に候へバ、

残幾かを円御送り下さるべく願上候、(人名1)

(人名1)君ハよくハ覚へ居られども、慥預り居る様にも思はれ候とかに候へバ、一応貴下の御手元にて御しらべ被下度願上候、(人名1)君の預り居る八円とかハ、(人名4)君に渡すべき学資とかに候由承り候、右一寸申加へ置候、

※児島が耳病であったこと、白馬会10周年展への期待が語られている。茶話会は、大原孫三郎より支援を受けていた在京者の集いである。その際の資金も大原が提供していたことがうかがえる。

(44) 大原家文書 F1208 明治三八年一〇月八日

(封筒上書)  
「備中国／都窪郡倉敷町／大原孫三郎様」

(封筒裏上書)  
「東京本郷区千駄木／林町貳百貳拾四番地中川方／児島虎次郎」

拝復、早速公森君に問合仕り候処、同君ハ少しも承知し居らざる様申越され候、

(人名1)君ハ今回分の会費の内、八円を預り居る様な記憶も少しハ有之候につき、八円ハ(人名1)君の手元より差出す様申され候、あまり慥に(人名1)君も覚へ居られざるに、小生の受取と云ふ事ハ何となく気の毒に思はれ候につき、貴下の御考へにまかせ申置べく候、(人名1)君ハしきに自分より渡す故、何卒大原氏の方へ申送らざる様申され居り候、

兎に角私の考へにハ相成さる事に候故、貴下の御考へにまかせ度願上候、前回の分にて算用違出来、(人名1)□□君が一人にて支払居らる、費用有之候と少しか、(人名3)□□君より聞及居り候故、今回の会費の中より差引、同氏に相渡し度存居り候、右取あへず御報知申上候、

着京以来専心勉勵致居り候、希望明々大に力づき楽しく学の道に従ひ居り候、張合ある事ほど人に勢力をつけるものハ御座なく候様考へられ候、非常の勤勉と充分の決心と誠の信仰を以て、大に猛進せんとする覚悟に御座候、

滞倉中の御高説、此頃思出してハ嬉しく味居り候、人ハ誠に働けば何事と云へ、ならざる事のあるべき精神一到何事かならざるらむの金言実に面白く候、

此の荒蕪たる大海の中、底根もなき浮島に生る立ちてうかくして居れば、底の藻屑となるハまのあたり、荒き波暴き風と戦ふべき覚悟と準備なくてハ駄目の事と考へ居り候、

閣下の厚き恵に謝せんため、充分務むる決心のものに御座候、あまり失礼の言葉出で恐れ入り候、草々

十月八日

虎次郎

大原先生 梧右

※茶話会に関わる担当者の思惑や経費の流れの面倒さを感じさせる。先の書簡とあわせて、児島が倉敷で大原としばし時を共にして語らったことがわかる。

(45) 大原家文書 F・192 明治三八年一〇月一三日

(封筒上書)  
「備中倉敷町／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏上書)  
「東京本郷千駄木林町／二三四中川方 児島虎次郎」

拝復、

京都よりの御手紙拝受仕候、茶話会の会費として拾円為替券落手致候、八円の分の事ハ前便にて申上置候通り、判然たらざる事に候へば、御考へにまかせ可申候、

此頃の旅行、何処とてよろしからざるハあるましく、まして古き都に色つく木々や山の姿なかも暮すハあまり悪しき事も察せられず候、

今日此頃の明月を京の名所になかむるハ、誠に羨しき事に候、

今宵の茶話会も恰度十五夜の明月、友と楽しく月を賞する、実に快よき事ならむ、(ママ)

月をながむれハ、何時も宮島の海上の月、明石の夕月など思出されてうたる夢の様なる感起り候、

忘れられぬものハうれしき時とかなしきものに御座候、今年ハ春より毎月月まろくなる頃ハ何時も夕空はれて、月かけ美しき事のみ、誠に月なかむるにハよろしき年に候、

毎度勝手なる事のみ申上候へ共、本月分の学資至急御送付被下度御願申上候、夜学へ通ふため、先日月謝や束脩、教科書やら辞書など買求め候ため、不都

合を来し閉口致居り候に付、何卒御察し被下至急御送付被下度、呉々も御願申上候、

ゐつも音信する度に何とかかとか自分勝手なる事のみ申上、何だか御迷惑計り相かけ相済み不申候へ共、其辺不悪御免し被下度願上候、

昨日、英国海兵入京、当市にハ歓迎とか何とかさわき立て居る様なれとも、市民全体が理わかりて歓迎して居るのかどうか、誠にうたかわしく候、虚礼ほと見苦しきものハ無之き事と覚へ候、われ／＼門外者ハ知らぬ場所に候と顔横けず候、

十三日

虎次郎

大原先生 台下

---

※語学学習のため夜学に通い始め、その経費負担に苦慮していることを伝える。

---

(46) 大原家文書 F・236 明治三八年二月一日

(封筒上書)  
「備中国倉敷町／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏上書)  
「東京本郷区千駄木林町／二三四中川方 児島虎次郎」

風寒く木の葉色つき候処、御変せもなく愈々御清福之事とうれしく奉賀候、

小生無異勉強と修養に心尽し居り候間、御放神被下度候、

御送り可申油絵延引致、誠に申訳無之事に御座候、本日、小包にて式枚差送り候間、御落手被下度候、先生の批評を乞ひ、欠点少なきもののみ送り置候、日を追ひ月をへて怠る事なく勉め進ま、何時かハ己の志す所に達すべし、神に誓し清き誠の道守りて心ある祈さ、げつ、尽さば、何時か神の住居に達する事を得む、我一身ハ神にさ、げし処、只信する神之命に従ひて全力を尽して其職分に務むべきものに御座候、

先日申上置候件、御承知被下候哉、目下必要にせまれ居り候間、至急先月分の学資御送り被下度願上候、本月分の学資も勝手ケ間敷候へ共、ともに御送付被下度、小生にとりてハ、勉強上都合よき事に候、右御依頼申上候間、悪しからず御承引被下度候、

茶話会の会計の事も申上置き候通りに候へバ、宜敷御考へ被下度願上候、

末筆ながら御高堂の万福を奉祈候、

十一月一日

虎次郎拝

大原先生 台下

---

※「先生の批評を乞ひ」とあるところから、児島が大原へと研究の成果として送る絵画作品に関して、東京美術学校の教員のアドバイスがあったことが推察される。他に、教員への作品揮毫の依頼のケースもあるので、黒田清輝や藤島武二に、児島と大原の支援関係はよく把握されていたと言えるだろう。

---

(47) 大原家文書 F・211 明治三八年一月三日

〔封筒上書〕  
「備中国倉敷町／大原孫三郎様／親展」

〔封筒裏上書〕  
「東京本郷区千駄木林町／二三四中川方／十一月十三日 児島虎次郎」

羽風寒く木の葉吹きしく頃、明月さゆる此頃の夜、如何に閣下はなし給ふらんと慕しく思居り候、

秋と云へば悲しきものと語る人あれども、さも思はれず、春にかわらぬ楽しみと望みともちて勉強致し居り候、

自己の天職を忠実につくしたる時(ママ)ほど楽しきもの嬉しきものもよもあらさるべく候、

幸に美しき巧の神の教へに導かれ、その日々を働にくらし居り候、神の愛と閣下の同情とを感謝しつ、

先月分の学資、(人名3)□□君より先日拝受致候、領収証延引仕り申訳無之事に候、学資つきた時ほど苦しき事も御座なく候、求め度き絵具も用る度きモデルも意の如くならず、誠に残念なる時もある事に御座候、

先月分例月より余分に御送り被下候段、深く感謝致居り、全く御同情のある処とそのまま、拝受致すべく候、

来る冬の休暇にハ、銚子方面へ写生旅行致し度く望み居り候が、如何に御座候哉、御許しも被下候へバ、旅費を来月始頃迄に御送り置被下度、充分なる製作を致すべき考へに御座候間、然様御承了之程願上候、

末筆ながら御全家様へ宜敷御伝へ被下度、謹て閣下の幸福奉祈候、頓首

十一月十三日

大原先生 閣下

虎次郎拝

※通常より多くの送金のあったことに感謝しつつ、写生旅行のプランを伝え、そのための支援を要請している。児島の画業への研鑽への没頭と、そのためには大原への経済的支援要請は当然といった関係が伝わる。

(48) 大原家文書 F・237 明治三八年一月二八日

〔封筒上書〕  
「備中国倉敷町／大原孫三郎様／親展」

〔封筒裏上書〕  
「東京本郷区千駄木林町／二三四中川方／十一月廿八日 児島虎次郎」

窓前之桐一葉二葉散りゆきて、梢淋しくなりそめ候、然し未たさほどの寒も無之、秋の心持なかむるにハ尤もよろしき時と覚へ候、嘸御門前の新川の水の面にも色美しき木の葉の浮び居る事と奉察候、御華邸皆々様にハ何の御変りも御座なく候事と奉(カ)遥賀候、

本日御送付被下候為替金参拾円正に拝受致候、内拾円(人名1)□□君に相渡し申候、

実ハ先日より閉口致居り候、早速借金も済せ、絵具・材良も買求め可申候、私(ママ)なとバ毎月のはじめに買求むべき品多くて、誠に閉口致す事有之候、相な

るへく候へバ、月の始めに御送り被下候へバ、勉強する上に甚だ都合よろしき事に御座候、

御送り可申油絵、先日学校に差出し置候間、返り次第早速御送り申へく候、  
右不悪御許し被下度候、

此の絵ハ植木屋の庭に花さきたる所に、温室の入口見へたる図に御座候、私ハ此頃何務むるにも涙たゝへられ候、此の涙ハ決して悲しみのそれにてハ御座なく、全く感謝と祈りの涙と覚り候、色々と静に己が身の上を考へる時、誠に自分の身の幸なる事は感し候、それ同時に自分の責任の重大なる事をも感し候、益々高潔なる品操と勇ましき精力とを以て己が職分を尽さんと存じ居り候、あまりながく申述へまじく、只私ハ閣下の高き恩愛に泣きつゝ、清き涙もて眼浄めつゝ、自然に對し怠りなく忠実に己が天職に向て務め居り候間、うれしくもおぼしめし被下度候、

御全家様へ宜敷御伝へ被下度願上候、頓首

廿八日夜半

虎次郎

大原先生 閣下

※「植木屋の庭に花さきたる所に、温室の入口見へたる図」は確認できていないが、学校の課題として提出した作品が、手元に戻り次第、大原へと送られるケースがあることがわかる。研究の成果報告として、そうした状況が常態だったのだろう。

(49) 大原家文書別 2・57 明治三八年二月九日 【図5】

(表面)  
「備中倉敷／大原孫三郎様」

(裏面)  
「本日小包にて油絵壹枚差送り候、願ハくハ額椽へ御嵌め被下度候、

学校は此頃休業に候(研究科のみ)、夜学も十五六日頃より休業の由に候へバ、其頃より直に写生旅行に銚子方面へ出発致度き望みに候、

一ヶ月位かゝりて少し大きな物描き度考へ居り候、其内出来るだけ一日も早く出発致すべく候に付き、何卒至急御送り置き被下度、呉々御願申上候、絵具・材良など用意致し置き度、冬の休み頃になれば、絵具など品切になるかも知れず候故、早き方凡てに都合よろしき事に御座候、

十二月九日

虎次郎

東京中川方

(50) 大原家文書 F・213 明治三八年二月一四日

(封筒上書)  
「備中国倉敷町／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏上書)  
「東京本郷区千駄木林町／二二四中川方／十二月十四日 児島虎次郎拜」

御手紙只今拝見致候、

直に心こめて黙祈をさゝげ候、祈終りたる時、我眼の涙もて満されたるを感

じ候、

御手紙の僅なる文字を通して、閣下の高き人格と親しき愛情に接し候我心の奥の奥に、閣下の美しき心を受け候事、誠に感謝の外無之候、我靈魂の内に誠の感化を与へられたる事、此上の賜物ハ無之候、如何で余ハ奮励せず居られさらむ（君の歴史に付て静思の一句ハ非常に余の心を射り候、余と余の及ハざる所を謝し候）、親が子を見るがごとき厚き閣下の真情に接し、余ハ誠に嬉しく一命を捧けて充分天職の為に奮闘致すべく候、

あまり多く語る事のうるさきも免し給へ、

信仰尚浅けれども、余ハ神を信するの熱心を持ち居り候、我に誠に神の前に尽す時、常に大なる不可思議なる力の余の心の内行の上に行はる事を深く信られ候、

年暮れたりとして、何ぞ嘆せむ、已に尽す所誠ありせば、古人の落花を嘆するあり、何の愚そや、花咲くも花散るも神の言ならずや、其の間に神の命を尽す、是れ己が務めなりと信じ候、されど日一日と過ぐる間、その日くを己が失敗の下に送りつゝあるを自覚致居り候、

噫今日も戦に敗れたり、又勝利の境に進まれさりしかなしさを、されと其の敗るゝごとに愈々自己の決心の厚くなり行く事を覚へ候、何日かハ怠りなくハ勝利のよき日見る得んと楽しみつゝ、神の教のもとにその日を送り居り候、我に常に告ぐるものハ、汝の責任を自覚せよと云ふ事に候、噫思へバ我が責任ハ重大に候、天晴れ己の責任を全く致すべく誓居候、

御貸与被下候金三拾円、正に拝受仕候間、受領証差送り申上候、  
出発ハ何日か未定に候、夜学が十五日過迄である様子に候、

末筆ながら御全家皆々様へ宜敷御伝へ被下度願上候、謹て閣下の幸福を祈り

居り候、

嬉しからずや我に希望の満ちくたるあり、神の救の大なるあり、誠に余ハ幸福なる身ならずや、

不敬の所幾重にも御免し被下度候、

年暮れかゝりたる十二月半なれとも、小春の暖かき日、西日あたる三畳の住なれる室に御手紙を前になかめつゝ、

十四日

虎次郎拝

大原先生 閣下

〔51〕大原家文書別2159 明治三八年二月二五日【図6】

〔表面〕  
備中国／倉敷町／大原孫三郎様／銚子犬吠岬東館／児島虎次郎

〔裏面〕  
「昨夕星の光輝きそめたる頃、銚子へ着し候、宿を海に近き犬吠灯台の近くに  
とり候、昨夜ハうれしく人声絶たる此の浜に、荒岩砕く波音聞きつゝ、夢むす  
び候、名しおふ波ハ高く、海ハ限りなきながめに候、かゝる美しき自然に接  
するの幸なる事を切に感謝致候、

十二月廿五日

クリスマス朝

清き浜風うけつゝ、

虎次郎

大原先生」

※希望を伝えてきた銚子行きが実現したことがうかがえる。次に紹介する書簡でも写生に苦しむ様子が伝えられるが、この成果となる作品の現存は確認出来ない。

〔52〕大原家文書別2158 明治三十九年一月一日〔図7〕

〔表面〕  
備中国／倉敷町／大原孫三郎様」

〔裏面〕  
「毎日写生に苦しみ居り候間、御安神被下度候、

苦しむほど面白く相成り候、

銚子観音前吉野屋にて

虎次郎

明治卅九年元旦

大原先生 梧右

うれしく新年を迎へ候、謹而同胞の幸福奉祈候、」

〔53〕大原家文書F1238 明治三十九年一月一日

〔封筒上書〕  
「備中国倉敷町／大原孫三郎様／親展」

〔封筒裏上書〕  
「東京本郷区千駄木林町／二三四中川方／一月十日 児島虎次郎」

幸なる新なる年にむかへられてはや一週日をすこし候、その日／＼のすみやかさおとろくより外無之候、旅行より帰りて数日、写生の修製に忙しく、思はず御無沙汰仕り申訳無之候、何れ数日のうち製作を終り可申、画面の干き次第御目にかけ可申候、今度の旅行ハ私に一方なざる力<sup>ら</sup>を与へ候、やかて技なりたる年、此等の感想が美しき画題となりて現る、事を信じ居り候、

うるハしく感せし此の自然の味ハ、とても只今の私の技術にてハ人に語れ申ましく、又自身に於ても承知致されず、誠に憐なるものに候、

大空浸せる広海の面に、よせてハかへす男波女波の奏つる曲、

夢であろうか、現であろうかとうたがわれし事礎に幾度か、

如何にして此の極美の様が写せるならむと筆もちつ、力弱りし事又幾度、さ

れと此の稚き筆を画面に添ゆるそのうちに、おのれにも無き力の宿り来て、

覚へもうとき何時の間にか絵のなる事もあるべく候二ハ、

自然にあこがれのおもひ熱きが恵みかと考へられ候、此の身に切なるあこが

れと誠の恋のある時、そこに巧の神の美しき愛の手ハ、此の憐なる身をも導

くならむと信じ居り候、

あゝわれハ清からむ、誠たらむ、

わか心にくもりなく、わか心にうれるとうたかゝるなくバ、何とて見るもの聞

くものに愛と情との無らむ哉、あゝわが心の楽しさ、神の衣に涙を染めて感

謝致すべく候、思ひ起す思へバおもふほど、厚き閣下の情うるはしき閣下の

姿かな、言の失するをゆるし給へ、

上野に響く夜半の鐘声を今耳にき、候、万物静なる此の刻、両眼としてすき

し事共思ひかへす時、我心の中にやとるもの、そハ何事ならむか、神の御前に閣下の高き恩恵を告げつゝ、心ゆく感謝の黙祈にて候、

ゆるし給へわが情の足らざる所を、

かく心の行く時、われハ無限の美しき園にさまよる行く事を現つながら夢み候、わが眼に涙みつ今、その園の草木の上にも露のみつを覚へ候、

噫夢心地な<sup>りし</sup>今、われハ何ものならむ、如何にしても我に我なき様覚へられ候、

尚かくべき用事などあり候へ共、今ハ語らむ事の何となくうるさ<sup>く</sup>も覚へられ候まゝ、今宵ハ此のよき心地懷きてねむりの床につき、より美しき夢地にたるとるべくうれしき事に御座候、

その園にてハ、遠くまします閣下の姿、とく此の世ゆきし我親しき父なども会して楽しく語る事も出来候はん、あゝ嬉し、九日の夜半に、

ねむり覚て今朝此の手紙読みかへし候へバ、何たか訳のわからぬ事の方に候、心の底ハとても筆や言葉にてハ語れましき事と存し候へバ、御ゆるし被下度候、

上野の学校も昨日より始まり、夜学ハ十五日より候、新なる年と共に、新なる力加へて充分なる勉励致すべく候、

先日御依頼申上置き候本月分の学資、目下閉口致居り候間、至急御送付被下呉々も御願申上候、毎々都合よき事のみ申上、何とも恐れ入たる次第に候へ共、致方もなき事に候へバ、不悪御免し被下度候、

我学校に今度音楽部の新に設けられ候も、私の夜学の時間と突合て出る事も

出来ず候、我師のすゝめと我心の好むまゝ、ゆく末の友としてバイオリンの音覚へ度く、先月<sup>より</sup>日曜日の半日をのみ此方に費す事と致候、此の清き音につかれし時の頭淨めむとする心やり御ゆるし被下度候、夜学と此方にて月謝の嵩むにハ少々くるしく候、

われハ常に慕しき閣下のなつかしき言葉聞かむと望<sup>むカ</sup>くものに候、如何に楽しく閣下の文に接する時、わか心のおとる事を、閣下の心の中に宿せらるゝあつきおもひに恋しく候、もしわか心のうたかわしき時も生せし時ハ、われに其の由御聞せ給らハ、如何にうれしく其の罪あらため申べく切なる望に御座候、心せまりきて語る事も出来不候、

悲しき時の事共回顧すれば、僅の喜もより楽しき事に候、人生ハ勝利にあらず戦争なりと誠の諺に候、登校の時間とも相成り候、是にてかき止め可申、くたらぬ事あまりなく<sup>カ</sup>つきつゝ、け失礼致候、

謹而感謝の黙祈をさゝけ可申候、  
御巖父・御令室へ宜敷御伝へ被下度候、頓首

一月十日

虎次郎

大原先生 膝下

※近況としては、銚子旅行でのスケッチからの制作の継続を伝える。

ただ【紀要1】掲載(6)大原家文書F1309 明治三十九年一月二九日<sup>1</sup>では、大原より児島の滞欧が許された様子が垣間見えるが、そうしたやり取りもあるためか、この前後の児島が純粹な向上心を持ち、大原

への深い感謝を伝える内容が増えている。

また児島が、バイオリンの練習を始めたことを伝えている。

(54) 大原家文書 F-240-1 明治三十九年一月一日

(封筒上書)  
「備中国倉敷町／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏上書)  
「東京本郷区千駄木林町／三三四中川方／一月十九日 児島虎次郎」

梅もぼつ／＼咲きそめ候へバ、桜もほと遠からさる事と相成候、此頃毎日の晴れつ、きにて、心地よき事に御座候、

御貸与被下候本月分の学資、本日慥に拝受仕居り候間、受領証差送り申候、本日小包にて海の絵御送り申居り候、実ハ二日程延引致候段御ゆるし被下度候、少し手元都合よろしからさる為めと御察し被下度候、

毎度ながら小生より御送り候絵につみてハ、閣下の批評承りたく、只閣下の如何なる点が気に入らぬか、如何なる所が意にかなるかを一口御知せ被下候へバ、小生にハ少なからざる益と相成る事に御座候、梓へ張りて後、御覧被下度願上候、何るべくハ額椽へ御入れ被下度願はしき所に候、場所ハ少し暗き所望ましく候、

此頃何となく望み多く、絵を作る事うれしく覚居り候、何をやるにも時間の不足なるハ残念の事に候、人の云ふ事ながら、自分にて二つの体持ち度きものに御座候、

自分の心のうちに何たか立派なる絵の出来上りた様考へられ候へ共、画布に写すためにハモデルも色彩も要する事に御座候が、己の描かんとする様なモデルは中々広き都にも求めがたく、銭で雇れ候モデルにハ、ろくなものハ無之、それとて無暗に頼む訳にも行かず、中々六ヶ敷事に御座候、よき賞牌を得るにハ、よきモデルを要するとハ誠の言に御座候、

自分の意のまゝの製作をなして、其絵の前に腰すゑてなむる時ほど心地よき時ハ無之候、幾十年其絵の前になかめて尚あきたらさると云ふほどの絵が早く描きて見度く候、然しこれも一生懸命にやれハ、何時かハ得られましきものにてハ無之かと存候、必ずやつて御目にかけるつもりにて候、

それにつけても、早く一目見たきハ古人の身血をそゝきてなせる多くの名画にて候、

泰西の名画や風光の夢に入る事少なからず候、またしてもあまりなか／＼しく相成りて失敬仕候、先ハ当用迄に御座候、尚、寒さきひしき頃御養生專一に奉祈候、不具

一月十八日

虎次郎

大原先生 台下

追啓、御願申度き事有之候へ共、次便にゆづ可申候、皆様へ宜敷御伝へ被下度候、

※心情を伝える記述が多いが、最後には明確な渡欧の希望が述べられている。

(55) 大原家文書 F-240-2

明治三十九年一月一九日

【F-240-1と同封】

今朝、海の絵小包にせんと粹去らむとする時、幾度かためろひて、絵の前に立つ事一時、

もとより深々なかむる程の絵ならむ、人の目にハ拙なき筆とも見られむ、

何を恨まん、如何様に評さるゝとも、

されと我にハ実になつかしき絵にて候、なかめてあれバ氣ハ何時しか遠く太平洋の波間に通ふ事に候、

筆とる時の苦しさと、絵なりし時のうれしさと、思くらふれハ、楽しき事に候、

遠きく海の方にハ亜米利加と云ふ国のある事、人の語れとも、我れにハ誠と考へられず候、如何なる天国の海の彼方にあるならむと、無我の思に沈み候、

我に情と誠とを以て描きたる絵ハ、例へ人にハ美しく見へさるにもせよ、我のみにハ幾度長くなかなかむるもあかす候、此の絵も自分の理想の様な

(緑カ) 額椽へ嵌て一目見度きものに御座候、

今此の絵と別を告げ可申候我室ハ、淋しく相成るべく候、

夜の床につく時、一時なかむるを例とせる我製作の一つなる此の絵、此宵よ

りハ影もなくなる事と思へハ悲しく候、

閣下、心あれハ我製作も我身と等しく愛し給へかし、

我製作ハ余か誠の愛子にて候へバ、

閣下、心あれハ余が送りし幾枚の絵、写真に影して、昔の製作を恋しく思ふ

余を慰め給らむ事を祈り居り候、

一寸、心せしまゝかきそへ候、

十九日

大原先生 台下

虎次郎



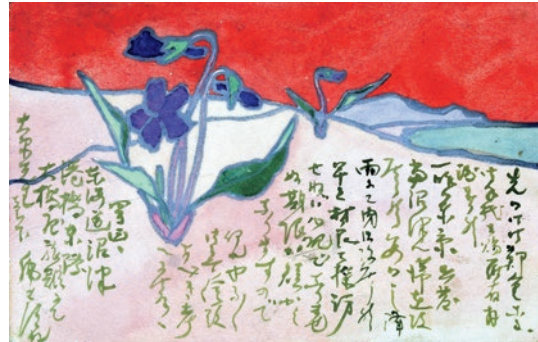
【図2】「元禄のおもかげ（白馬会出品）岡田三郎助君筆」  
絵葉書



【図1】「有るかなきかのとげ（白馬会出品）和田英作君筆」  
絵葉書



【図4】風景 絵葉書



【図3】児島虎次郎自筆 スミレと風景 絵葉書



【図6】児島虎次郎自筆 灯台と岬の風景 絵葉書



【図5】川辺の西洋画 絵葉書



【図7】児島虎次郎自筆 利根河口の風景 絵葉書